



隅楼からみた東院庭園

発掘調査は各調査室からメンバーを出し、チームをつくっておこないます。遺構調査室のメンバーは、計測修景調査室が担当していた測量をおこなうほか、建築史や庭園史といった専門的な視点をもって作業にのぞみます。こうした調査体制は調査部はじまって以来のもので、奈文研の発掘調査の特色ともいえます。考古の研究者だけでなく、建築や庭園、史料の研究者が共同して発掘調査をおこない、精度の高い成果をあげてきたことは、特筆に値します。また遺跡の正確な位置を示す測量のデータ、実測図や調査日誌など発掘調査の資料を整理・管理するのも、遺構調査室が担当している重要な仕事です。

つぎに遺構調査室の研究活動について述べましょう。遺構調査室の主要な研究テーマは何ととっても、発掘調査で見つかる建物や庭園の跡など遺跡についての研究です。これまでも遺構調査室では宮殿や寺院の建物や門扉など遺構について、計測修景調査室では平城宮の配置計画や平城京の条坊地割、発掘庭園について研究をおこない、その姿をあきらかにしてきました。また、こうした研究の成果を社会に還元すべく、整備の方法についても研究をかさねてきました。たとえば、平城宮跡の東南隅に復原整備された東院庭園は、この2室の研究成果を目にみえる形にあらわしたものです。



隅楼

研究室紹介

遺構調査室（平城宮跡発掘調査部）

今の遺構調査室は、2001年の研究所の独立行政法人化にともない、建築研究部門の遺構調査室と庭園・整備研究部門の計測修景調査室を統合して誕生しました。現在、遺構調査室には建築担当4名と庭園・整備担当1名の計5名の研究員が在籍しています。研究員は、室内の様々な作業を一手に引き受ける4名のスタッフに支えられ、調査・研究活動に日々いそいでいます。

平城宮跡発掘調査部には、遺構調査室のほかに、考古研究部門3室と史料研究部門1室があります。

遺構調査室の目下の課題は、第一次大極殿および大極殿院の復原整備事業への協力です。この事業は、2001年度から奈文研にかわって、文化庁が直接進めることになりました。学術面での指導・助言と立場はわかりましたが、研究成果にもとづいた復原整備事業であることはわかりありません。遺構調査室では、所内の各研究室や調査室と協力して、この調査・研究に取り組んでいます。